

# 第7回研究会より

参加者 9人+森田智幸（山形大学講師）先生

前回同様、山形大学正門に朝10時30分に森田智幸先生と約束して、お会いし、そこから新庄に私の車に乗っていただき、本研究会に参加していただきました。

## 1 丹さんプロデュースプログラム

丹さんが今回用意してくれたプログラムは、5月24日に山形大学附属中学校公開研究会で講演なさった佐藤学教授のビデオをみて、話し合いを行いました。

あらかじめ、丹さんがテープお越しをしてくれましたので、音声聞き取れないところもわかりやすく理解することができました。



講演を聴いて、納得したこと、わからないこと

- ・ 依存と自立ができないのが、現代の子どもの大問題となっている
- ・ どの子ども、授業開始の10分間は期待感をもっている。はじめからつつぷしている子はいない。これは小中高全部で言える。だから、開始の10分間は黄金の時間。こういうときに個人作業を持ってくるから、子どもの期待が裏切られる。個人作業していたことを共同学習に変えたい。授業開始の早い段階で、共同の学びを入れると、だれもつぶれない。個人学習はいらない。創造的な人（クリエイティブな人は始まりを重要視する）

→個人作業をしないというのが議論になりました。個人作業と自立解決との考え方、この講演を聴いて、個人作業を共同学習に変えたという紹介など、参加者おのおの考えを議論しあいました。三上さんからは、社会科の例をとおして、個それぞれで課題を把握する時間は大切ではないかという話がありました。また、読む活動などで、文章を自分の中で解釈するときなども、個の時間があるという考えもだされました。

森田先生からは、自立解決＝勉強は **education** と **training** との違いに似ている。課題を捉える際に、グループでの学びにすることで、多様な考えと出会うことの大切さ。そのためにも多様な考えがでるような課題づくりが大切。『個人作業を共同化しよう』という授業の意識改革。

グループ学習の捉え方として、4人の視点から困難さに挑むために行うこと。三上さんは、議論の後、教師自身がとらわれているものがあり、それによって教室の変革が進まないという自分の気づきについてお話がありました。



・グループのまとめを貼って発表するという活動ではなく、そのまとめるまでに至った過程を発表させることが大切

→子どもは、ひとつ理解したと思ったとき、次の世界にはいきづらくなる。つぶやきの段階のときが、次や次の世界にいきやすいときでもある。(森田先生)

- ・ デザインとプランとの違い。プランは前もってつくること。プランには予測がある。デザインには予測がない。今が大切。前もって作るが今もつくる。デザインとは状況または素材との対話。デザインは今の状況の中で変わる。プランは緻密であるが、デザインは緻密であると動けなくなる。
- ・ 小1・2年の低学年は、全体との学びはできる。先生が中心だから。でも4人グループで成功した例はみたことがない。だからペアで。
- ・ 21世紀の社会と教育

① 知識基盤社会への対応＝産業主義社会からポスト産業主義社会へ＝生涯学習社会

② 多文化共生社会への対応

③ 格差リスク社会への対応

④ 成熟した市民社会の建設＝「市民性」の教育＝公共モラルの確立

学習指導要領は①にしか考えていない。そこが問題。必ず10年後にはこの4つが出てくる。

- ・ これからの国は「**Quality**【質】」と「**Equality**【平等】」を同時に追求している国が成功している。フィンランド、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド
- ・ 逆に「**Quality**」は追求したが、「**Equality**」は追及していない国、ドイツは失敗している。さらに「**Equality**」は追求したが、「**Quality**」を追求していない国、例えばイタリアはだめです。これらは言葉を変えると、教室の学び

の質を高めることと、一人残らず学びを保障すること。  
→田中さんから、算数の時間、課題によっては早くできる子と、まったくできない子とが出てきて、早くできた子にはさらに高い課題を渡すのだがそれもある程度こなしてしまい、どんどん差が開いてしまう悩みが出ました。保科さんは、2年間の実践したことを紹介して、算数の力のベースとなるには音読の力だということで、毎日音読に力をいれたら算数の力も向上したこと報告がありました。高橋（晋）からは、早くできた子とまだできない子をつなぐ工夫がこれからの教師には必要ではないかということと、早くできた子に、わからない子が尋ねるような関係作りが必要なことができました。高橋（欣）さんからは、スモールティーチャーを作ることの危険性が話されました。話すことの指導にエネルギーを注ぐことから、聞いたり尋ねたりする側にそのスキルを教えてやることにエネルギーを使うことが大切なのかもしれないという話もできました。

森田先生から、子どもが授業にアクセスできる権利という話がありました。保科さんの挑戦した音読活動などは、算数の授業にアクセスできる権利になっていたのだろう。権利をもっていない子どもは、算数の授業を受けても落ちてしまうというお話でした。

・21世紀になって、複式学習の方が学習公開があがることがわかっている。2年→4年→6年の教科書しか使わない。日本と違い、複式でも世界の複式は、異学年が一緒に学んでいる。質の時代にとっては、学年単位がフレキシブルになるのは当然なこと。

→豊岡さんや保科さんは、過去に複式学級を体験なされていたので、そのときの感想をお話してもらいました。お二人とも、複式はできる限りもちたくないという感想でした。

森田先生からは、異学年の複式では、プロジェクト学習で進めることになるということ。階段で思考が深まるという考えと螺旋方で思考が深まるという考えはまったく別物で相容れない。考えを別に転移できるには、何度も何度も出会いがないとできない。そう考えると、螺旋方の思考方法が重要。ブルーナーではない。

以上で、議論はすでに2時間以上になってしまい、丹さんが用意してくれた、「授業記録の精細化について」を行うことができませんでした。そこは、またつぎの機会を見つけてプロデュースしてもらうことになりました。

ビデオカンファレンス（千葉県八千代市立睦中学校 中学3年 音楽と歌声対話集会）

今回は、森田先生がお持ちになっていただいた、睦中学校の音楽の授業と全校集会での対話集会のビデオをとおしてカンファレンスをしました。

まずは、最初に睦中学校とたけもり校長先生について森田先生から説明がありました。このDVDは、学友会という地域の方々からなる組織で作られ販売されていること、それで利益をあげた分で、交流しているシンガポールに生徒を派遣したり、先生がたの研修代などに使っていることなどは、授業改善だけで学び

の共同体を進めているのではなく、学校運営の中心として学びの共同体を押し進めていることを知り、一同考えさせられました。

音楽の授業の前に、“どんなときも”を全員でいきなり合唱。後半は、男女腕をとりあいながらスイングしての合唱だった。

授業開始の挨拶の後、今日の題材「花の街」の学習がはじまった。

全員で合唱。教科書を持って。中には、じっと教科書をみながら歌う生徒も男子1、女子1見られる。

## 「花の街」

江間章子作詞・團伊玖磨作曲

七色(なないろ)の谷を越えて  
流れて行く 風のリボン  
輪になって 輪になって  
かけていったよ  
歌いながらかけていったよ

美しい海を見たよ  
あふれていた 花の街よ  
輪になって 輪になって  
踊っていたよ  
春よ春よと 踊っていたよ

すみれ色してた窓で  
泣いていたよ 街の角で  
輪になって 輪になって  
春の夕暮(ゆうぐ)れ  
ひとりさびしく ないていたよ

全時に1.2番の歌詞は、明るいこと。3番の菓子はずらいこと。戦争のことを語っていたということを学んでいた。

3番の歌詞はあったほうがよいか、無かったほうがよいかの議論からはじまった。

全時で歌詞の意味を学んでいる。議論は、戦争の悲しさを伝えるためにもあったほうがよいという考えだった。4人発言者数。

T：「もし、3番だけ曲想を考えていいよと言われたらどうする？」

本時の課題が提示された。

同時に使って欲しい記号も話された。

rit (リタルダント) ゆっくり

間

強弱 (<>)

mp

p

mf

f

以上の記号を取り入れて考えるという話の後に、男子2女子2の4人グループに分かれて、ホワイトボードに楽譜が貼ってあるものを班長がとりにきて、そこに先ほどの記号の磁石をはりつけながら共同学習がはじまった。

T：「ボードを使って考えましょう。歌いながらやるよ。10分ぐらいで」

映像でみると、まずは、一列に mp～f まで強さ順に並べているグループが多かった。

生徒A：間って何？

B：一瞬止めて歌うところ

A：俺さ、ここに付いたらいいと思う

その後、4人で歌いながら、修正作業に進む。

10分後にもういちど、全グループ集まって、考えを述べ合う。

T：先生失敗したことあったんだ。遅くしたら、そのまま遅いままだけえないよね。もどる記号も欲しかったんだ。

その後、どのように記号を入れたかその根拠を語らせて、4人ずつ合唱をさせていく。

Aグループ

女子：曲の感じで記号をつけました。深い意味はありません。

Bグループ

女子：ひとりさびしく泣いていたよを強調するために、そのまえに rit をいれました。

合唱

みんな納得の様子

T：ゆっくりはそこじゃないよという班はない？

Cグループ

女子：私たちは、春のゆうぐれの最後を強調するために途中に rit をいれました。

合唱

T：ちょっと違ったよね

男子：僕の班も同じところに rit をおいたんだけど、最後が強調されていていいなあ

と  
思  
っ  
て。

T：それぞれのよさがあっていいなあと思った

Dグループ

男子：雰囲気的にこうなった。

女子：わたしも雰囲気的に

合唱

T：本当は教科書をみるとわかるんだけど

生徒：一斉に教科書を開く

T：本当は1番から3番まで同じ強弱なんです。みんなは3番だけ違うことを学びました。どうした方がよかったのかカードに書いてください。

最後に全員で、合唱

誰一人、教科書をもって歌う生徒はいない。最初の教科書をみて歌っていた男子も女子も今は教科書をみて歌っていない。

（第3回歌声対話集会）体育館で、学年ごとわかれコの字がたに。テーマは歌ってきて学んだこと。

3年女子A：1.2年正に伝えて生きたい

↓

3年女子B：みんなと歌うことの楽しさ

↓

3年女子C：有志合唱団に入ってきたが、歌の背景を知ることが大切

↓

3年女子D：心を込めてをがんばった。（歌は）自分を表現するために大切なもの

↓

2年女子A：Smileは気持ちを込めて、歌うことから学んだ

↓

1年女子A：先輩方を見て・・・ひとつになる

↓

3年女子E：2年〇〇ちゃんと1年〇〇ちゃんにもあったように、自然とできるSmile、ひとつになっている実感を感じた。でもここで終わりじゃない。

↓

3年女子F：2年〇〇ちゃん、1年〇〇ちゃんからあったように、そのさきにあったら・・・つながっていて、がんばれるものが先にあって。廊下の写真などをみて、私はこんなにわらっていたんだと思った。

↓

3年男子A：指揮者は自分を表現できる。歌っている人とは離れているけどつながっている。

↓

3年男子B：テーマ変わるかもしれないけど。みんなはどうして歌っているの？



それを聞きたい。

↓

3年男子C：小学校のとき音楽が嫌いで、中学校にはいったらすごく怖くて美人な音楽の先生で。歌っていくうちに好きになって。今は歌いたいから歌っています。

↓

2年男子A：自分の気持ちをうったえられる。

↓

3年男子C：好きだから歌っている

以下省略

→どの生徒も表情がやわらかく、共同の学びのイメージを作るには最適な授業だった。千葉さんからは、グループごとの感想などは、はっきり聞き取れないことばが多かったが、歌うことになると、堂々と歌っていた。生徒たちは、歌は表現の道具という感覚をしっかりと持っているのだろう。高橋（晋）さんからは、音楽の授業に限ってなのかわからないが、女子がリードして男子が縁の下で支えている様子がたくさんみられた。男子を支える女子の姿は多くみられるが、その逆もあるということが驚いた。

対話集会は、全校の中でも話せることがすごい。1年も2年もみんな名前を覚えている。学校規模が小さいからみんな名前知っている。やはり3年女子の語りが多い。発言量も多い。しっかり、会話内容が繋がっている。味わうと説明するとの違いを感じた。



[戻る](#)